

批評と紹介

エジヤトン氏「佛教梵語文法・ 辭典」「佛教梵語讀本」

辻 直 四 郎

- Franklin Edgerton: Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary. (William Dwight Whitney Linguistic Series.) Volume I: Grammar, 4°, XXIII, 239 pp., Volume II: Dictionary, 4°, 627 pp., New Haven: Yale University Press, 1953.
- do. : Buddhist Hybrid Sanskrit Reader. (William Dwight Whitney Linguistic Series.) 8°, IX, 76 pp., New Haven: Yale University Press, 1953.

佛教の經典を書き傳えたインド語の中、梵語およびパー

シヤトン氏「佛教梵語文法・辭典」「佛教梵語讀本」 辻

リ語は廣く知られ、その文典・辭書も備つてゐる。いわゆるブラークリット・ダルマパダ (Ms. Dutreuil de Rhins) に見られる中期インド語の一種も、かつて佛教聖典に用いられた言語の一つを代表するが、その資料は限られ、その方言的位置ならびに特徴も研究されている。しかしこのほか一群の佛典に使用されている言語は、程度の差こそあれ、正規の梵語の標準に合わない音形・語形を示し、特殊の語彙を含み、從來漠然と混淆梵語或いは佛教梵語等の名によつて呼ばれてきた。エジヤトン教授がここにその本質を明らかにし、文法を整理し、辭書を編み、將來の研究に確乎たる基礎を與えたのは、正にこのブディスト・ハイブリッド・サンスクリット (BHS, 以下略して佛教梵語と呼ぶ) である。

第一作文典の序論において、著者はまず原始佛教の言語問題に於て、佛陀在世當時から各種の地方的方言の使用が許されたことを認めてゐる (一・七——一三)。既に提唱された種々の學說 (S. Lévi, Lüders, Hián-tin Deschi) に検討を加えた結果、佛教の聖典語は本來一種に限られたものではなぐ、佛教宣傳の重要な中心となつた諸地において、それぞれその地方の方言を基礎とした言語による聖典が、次第に成立したとする見解 (In Likouang) を採り、佛教梵語もまたかかる言語の一種であつたと斷定している。パーリ語におけると同

様、この種の言語に當初から方言混淆のあつたことは、もちろん容易に了解される(一・一四—三二)。

著者は佛教梵語或いはその傳承の主要部分の基盤となつたブラークリット語を、東インドの方言に求めようとする見解には賛成しない。混亂状態を示すかに見える佛教梵語も、その共通する特徴を精密に分析すれば、ペーリ語におけると同様、本來その基底に方言的統一性をもつたものと考えられる。若干の共通點を示しながらも、その文法上の形態はペーリ語と異り、アルダ・マーガデー語とも特別の親近性をもたず、アパランシャ語よりは概して古い段階に屬し、從來知られている中期インド語の何れの一つとも特に密接な關係をもつていない。従つて佛教梵語は、その言語的特徴によつて、獨立の一ブラークリット語を形成するといえるのみで、その基礎となつた方言を地理的に規定することはできない(一・七八—一〇五)。

現存する佛教梵語の最古の作品は、恐らく西紀前一世紀以上にかかのぼるものと思われるが、その傳承の最もいちじるしい特徴は、時と共に進んだ梵語化(Sanskritization)の傾向である。しかし全篇を完全に梵語に翻譯するには至らず、古い作品ほど、その言語の基礎が中期インド語にあつたことを反映している。梵語化の結果として、正規形と中期インド

語形とは、相並んで用いられ、しばしば兩者の何れでもない混種をまじえる。この状態において佛教梵語が、眞の日常語として使用されたとは想像できず、ただ宗教上の目的に役立つたものと認められる(一・三三—三五)。

梵語化の範圍・程度は時代によつて大きな差があり、同一書の中においても、部分によつて異なることがある。この言語的事實を規準として、佛教梵語の作品を分類することができるが、これはあくまで梵語化の過程を経た現存の形についていうことで、原典自身が最初に成立した年代とは必ずしも一致しない。この言語的見地から、著者は佛教梵語の作品を次の三類に大別し、傳承から見た年代の順序とほぼ並行するものとしている。

一、韻文のみならず散文の部分も、佛教梵語の特徴を示し、梵語化の程度の輕微なもの。マハー・ヴァストゥによつて代表され、他の少量の斷片がこれに屬する。

二、韻文は第一類と同様に佛教梵語の特徴を示すが、散文は比較的少數の中期インド語的特徴を含むもの。ただし語彙により、散文の部分もまた佛教梵語的であることが知られる。例えば、サッダルマ・ブンダグリーカ、ラリタ・ヴィスタラ、ガンダ・ヴィユーハ等。

三、韻文においても散文と同様に梵語化が進んだもの。言

語的に見て全體が、第二類の散文に似ている。従つて韻文を含まぬ作品にあつては、第二類に屬するものとしても差支えない。例えば、ムーラ・サルヴァースティヴァーダ・ヴィナヤ、ディヴィヤ・アヴァダーナ、アヴァダーナ・シャタカ等。

第二類の散文および第三類に屬する作品の或るものは、單に音形・語形から見れば、正規の梵語と殆ど區別できず、且つ韻文の部分についても、寫本および出版本は、しばしば梵語の外衣を被らせているため、韻律を指針として詳細に検討しなくては、その背後にひそむ中期インド語的發音を發見できない場合がある。從來これ等の作品或いはその部分の言語を、正規の梵語と嚴密に區別せず、梵語の一種とみなして怪しまなかつた。但しこの場合においても、一定の作品が佛敎梵語の傳統に屬するか否かを示す最も明瞭な證據は、專問語のみならず普通語におよぶ特有の語彙である。この故にこそ、馬鳴の作品は、若干の要素を除き、正規の梵語で書かれたものと認められ、ジャータカ・マラーは第三類に屬せしめられる(一・三六——三八、cf. Preface pp. XXV—XXVII)。

著者に従えば、佛敎梵語は正規の梵語と異なる言語的傳統を擔うもので、後者を扱う文典・辭書から除外されなければならぬ(一・七六——七七)。

ついで著者は、傳承の過程において梵語化が如何に増進し

たかを、具體的事例について説明し(一・三九——四九)、最後にその論證の結果を、七項に分けて要約している(一・五〇——五六)。(一)佛敎梵語の傳承は概して、或る初期の佛敎聖典乃至聖典類似のものから出發し、或いはこれにさかのぼる。そしてこれは、梵語ではなく、恐らく既に方言混淆を含んだ一種の中期インド語で書かれたものである。(二)梵語化の程度は、作品の新古の層或いは部分を、言語的に判別する標準となる。例えば、同一の物語に關する並行箇所を比較し得るとき、梵語化されない音形・語形・語彙は、これに相應する梵語化されたものより、常に本初の姿に近い。梵語化は時と共に進んだが、佛敎梵語の傳統は、數世紀にわたり、少くとも北インドの佛敎徒の間に宗敎語として續き、語彙の中に消すことのできない證據を残している。また梵語的外觀にもかかわらず、韻律が本來の中期インド語的發音を指示することがあり、たとひ確證はなくとも、少くも初期において、散文もまた韻文と同様に發音されたものと想像される。

本書はプラークリット語の一種と見なされる佛敎梵語の文典と辭書とであるから、その對象の範圍を正確に限定しておく必要がある。著者は兩部に含まれる資料の範圍および著述の方法について詳しく説明し、その意のあるところを明らかにしている(一・五七——七五、cf. Preface p. XXI; 一・一

○六——一一一)。在來の不完全な出版本に立脚して、これを批判的に處理した用意を窺うに足りるが、ここにはただ基本的輪郭を要約するにとどめる。すなわち原則として、正規の梵語形および梵語においても同一意義をもつ單語は、すべて除外される。その結果、*nirvāṇa* は除外されるが、*parinirvāṇa* は含まれる。いいかえれば、著者の意圖したところは、正規の梵語に屬しない要素——文法的にしる、語彙的にしる——を蒐集し、分類し、解明するにある。

文典の主體は、音論(二、三)、サンディ(四)、數(五)、性(六)、格(七)、名詞の各語幹の變化(八——一八)、動詞(一九)、代名詞(二〇、二二)、名詞の接尾辭(二二)、複合詞(二三)、動詞の變化、動名詞(二四——四〇)、*as* および *dhū* の特殊用法(四一)、*ma* の構文(四二)に分れ、各章は多數の節に細分され、佛教梵語に特有な動詞形の一覽表(四三)をもつて終つてゐる。この内容豊富な文典に索引を缺いてゐるのは、巻頭の詳細な内容目次(pp. IX—XIX)ならびに上記の動詞形一覽表、更に第二部辭典が、實質的に索引の代用をなすからで、同時に紙數の膨脹を避けるためであつたといふ(cf. pp. XXI—XXII)。

正規の梵語に慣れてゐる者から見れば、佛教梵語は甚だしい紛亂を呈し、文法組織は全體として崩潰の兆を示すかと思

われる。すべてのブライクリット語と同じく、強く單純化の方向に進みつつ、音形上の變化は形態を曖昧にし、縦横に交錯する類推は新しい文法形を生み、韻律の制約は母音の延長或いは短縮を餘儀なくさせて副次形を増し、これ等の結果は文法組織に對する觀念を弛め、次第に全般崩潰へ向つて進行する。單純化の傾向は過渡的にかえつて複雑な様相を現わし、現存の寫本および出版本によつて知られる佛教梵語は、拾收困難な状態を示している。しかも從來の校訂者は、依るべき基準がないままに、佛教梵語の本質を見失ひ、しばしばかえつて梵語化の方向に訂正するという過誤を犯した。良心的な校訂者の提供する寫本の讀み方を批判的に吟味し、並行箇所および韻律の要求を検討して、龐大な資料を分類整理し、同一機能をもつ數種の文法形、逆に數種の機能をもつ同一形に、それぞれ正當な位置を與えて、迷路に光明を投じた著者の功績は、佛教梵語の研究に一時代を劃したものと確信する。

しかし創見に満ちたこの文典の内容を列舉することは、書評の範圍においてなし得るところでない。ここにはただ一例を名詞の *a* 語幹、男性・單數・主格にとり、その要領を摘記するにとどめる。*a* 語幹は他の多くの語幹からの移轉語を吸收しており、用例も豊富であるから、佛教梵語の傾向を窺ひ、且つ本文典の内容の一斑を傳え得ると考えたからである。こ

の一例について見ても、二種の格或いは數に屬する語尾の混用があり、また本來或る性に屬する格語尾が、他の性の名詞に轉用されるのを知ることができる。

-o (八・一八——一九)。梵語において許された位置以外にも用いられ、大部分の原典では韻文に限られているが、マハー・ヴァストゥ (MV) においては散文にも非常に普通。

-u (八・二〇)。前記oの短縮形 (metri causa)。大部分の原典に極めて普通。但し韻文に限られる。MVには稀で、散文には使用されないらし。

-ū (八・二一)。前記uの延長形 (m. c.)。

-ā (八・二二——二三)。uより更に普通。殆ど全く韻文に限られる (m. c.)。MV. ちえ殆ど韻文に限って用い、この場合でも非常に普通とはいえない。

-ā (八・二四)。前記aの延長形 (m. c.)。韻文に用いられるが、MVの散文 (msa.) には數回の用例が認められる。但し複數・主格形(八・七八)との混同(逆に單數・主格形 -ā, -o が複數に用いられること(八・八三)を参照)、或いは女性・單數・主格形の轉用(逆に男性・中性・單數・主格形-uが女性・單數・主格に用いられること(九・一三)を参照)が考えられる。

-e (八・二五)。出版本に現れたところでは稀であるが、

MVの寫本によれば多數の用例が認められる。しばしば問題とされるこの語尾の分布については、一・三二脚註二一参照。

-ān (八・二六)。中性・單數・主格・目的格形、または男性・單數・目的格、或いは兩者からの轉用(六・六参照)。複數・主格において -ān が男性に(八・八六)、-ā, (ān) が中性に(八・一〇〇)用いられることを参照。名詞の性の轉換とも見られるが、むしろ文法上の性の形態的區別が崩潰する傾向を豫告する例證と考えられる(六・一——四参照)。

第二部辭書の含む語彙の範圍については既に述べた。正規の梵語と共通する單語および意義を除外して、在來の梵語辭書(特々 PW, pw)の併用を豫定したことは、この辭書のみによつて、佛教梵語の原典を理解しようとする者には不便であろうが、他面において、佛教梵語特有の語彙の範圍を明確にし、その差異を判然とさせた點において、却つて今後の研究に絶大の便益を與えている。各語の項下には、これに相應する梵語・パーリ語の單語が添えられ、もしこれを缺くときには、アルダ・マーガディー等の中期インド語形が擧げられている。既知の中期インド語の何れにも對應をもたない單語も存在し、佛教梵語がその文法においてのみならず、語彙においても、独自の體系を備えた一言語組織であつたことが知られる(一・一一一参照)。

本書は著者の二十年に近い研究の結晶であり、佛教梵語の最初の學術的文献と辭書とである。過去一世紀の間にインド學は、不朽の勞作、至便の參考書の出現により、新生面を開いてきたが、本書もその最も美しい金字塔の一つとして、今後長く全世界のインド語學者、佛教學者の必備書となり、感謝的となることに疑いはない。從來等閑に附されがちであつた領野を開拓し、文献の各行、辭書の各項が、周到な注意と批判的精神とを反映していることを思えば、二十年の歲月はむしろ短きに過ぎ、著者の異常な努力と學殖とを示すものである。専門の分野を異にする筆者には、到底本書を批評する資格がない。しかし一九三六年(BSOS VIII, pp. 501~516, HJAS I, pp. 65~83, Kuppuswami-Volume, pp. 39~45)以來、諸所に發表された論文を通じて、エシヤトン教授のこの方面における研究に、多大の興味と尊敬とをもつた一人として、且つまた佛典の研究に専念する日本のインド學界に、一刻も早く本書を紹介したいため、紙面を借用したに過ぎない。字典は細字二欄組みであるため、やや讀みにくい嫌いがあるが、鮮明な印刷と檢索に便利な章節の區分とは、これを補つてゐる。敘述は簡明であると同時に懇切、歴史的説明は現實に即して穩健で、無理な假説に陥らなから追隨し易い。本書の出現により、從來の出版本は寫本の讀み方に還つて訂正

すべき點が甚だ多く、學者は今後本書を指針として、批判的な校訂に邁進することが出来る。マハー・ヴァストゥは、現在知り得る限り、最も純粹な形において、佛教梵語を代表するとしても、原形そのままに傳つてゐるとは考えられない。佛教梵語が當初から、ここに集録された全ての文法形を包蔵してゐたとも思われず、梵語化の過程と同時に、佛教梵語自体にも幾多の變遷があつたに相違ない。マハー・ヴァストゥを超えて、更に本初の一統的狀態に肉薄することは絶望的であらうか。あらゆる意味において、本書は佛教梵語研究の集大成であると共に、その出發點である。

内容についての詳細な批判は、佛教梵語の専門家にゆずるとして、ここでは、語幹變化の範圍から一二の疑問を提出するにとどめる。Lalitav. (ed. Lefm.) p. 193. 10: nagarain vyakulu bhitrastamanaso は、五・五に於いて、名詞と形容詞との間における數の不一致の例として擧げられ、'the city was confused, (the people) with minds frightened and alarmed' と譯されているが、八・三六に於いては、o (the nom. sg. masc. ending) が nom.-acc. sg. nt. として用ゐられる例の中に、上記の箇所を 'manaso 'the city was perturbed with mind frightened and alarmed' として引用してゐる。manaso は誤植に過ぎないと思われるが、形態

の説明は八・三六（一六・三・六、七参照）に従う方がよく、数の不一致と見る必要がないのではあるまいか。八・五八（a 語幹・單數・屬格）は孤立例として、*MV vol. I, p. 165. 8: maraṅāya (v. l. ṅāye) pāraṇi* 'to the farther shore of death' の *maraṅāya* を擧げ、六・一〇は中性から女性（**marāṇā*）への移轉例と見なしている（辭書 *marāṇā* の項参照）。孤立例から結論を得ることは困難であるが、法華經に數回見せる *bodhāya……iābhinaḥ*（五・四四、辭書 I *bodha* の項参照）と同じく、上記の *marāṅāya* も、屬格の機能をもつ與格と解しては、甚だしく不都合であろうか。その場合 *v. l. marāṅāye* は、女性の共通斜格形 *-āya: -āye*（九・一七以下）の並存に誘發されたものと説明される。

最後に讀本は、佛教梵語の初學者の手引きとして、また演習用の教科書として編まれたものとして、*MV, Lalitav, Sad-dharmap.* のほか、*Mulasarvāstivāda Vinaya, Mahāpari-nirvāṇas, Udanavarga* から資料をとり、文典において解明された原則によつて訂正された原文に脚註を添え、主著者の参照によつて理解を助けている。單に入門書として適切であるばかりでなく、今後佛教梵語の原典が、如何なる方針によつて校訂されるべきであるか、またその場合に如何なる様相を呈するかを示す範例として、在來の出版本と比較する時、

一般のインド語學者にも、貴重な示唆に富んでいる。

（東京大學教授）

第二十三回國際東洋學者會議

(International Congress of Orientalists)

1951

第二十三回國際東洋學者會議準備委員會のセクレタリーをしておられるシノー氏より、左記の通知を廣く日本の東洋學者に知らせて欲しいと要望がありました。

イスタンブールで開催された第二十二回國際東洋學者會議の決議にもとづいて、英國王立アジア協會 (The Royal Asiatic Society of Great Britain) は、第二十三回會議を一九五四年八月二十一日より二十八日まで、ケンブリッジで開催するよう準備中であり、ケンブリッジでの宿泊設備は限られてはおりますが、會議の出席者はケンブリッジ大學の學生宿舍に宿泊することも出来ます。そのためには、參加者の大約の人數を出來る限り速かに知りたく存じます。參加希望の方々は準備委員會まで、その旨お知らせ下さい。會議には東洋學者はどなたでも御自由に參加出来ます。準備委員會には參加東洋學者のすべての方々の氏名・住處のリストが完全に揃つてはおりませんから、たとひ個々に招待状を受けとられなくとも、參加希望の方は直ちに左記宛にお知らせ下さい、特に要望致します。

(宛名) The 23rd International Congress of Orientalists,
Organising Committee,

QUEBENS COLLEGE, CAMBRIDGE, ENGLAND.

會議に關しての詳細な御案内は參加の意志を準備委員會にお知らせ下さつた方々に直ちにお送り致します。大學・圖書館・學會等の公共機關又は研究所の代表者として招請状を必要とされる方は、出來る限り速かに準備委員會まで、その所屬公共機關又は研究所の宛名をお知らせ下さい。